

いんたびかー

「これまで、どのような番組を視聴してこられたか？」

「私はいわゆる『ラジオ・テレビっ子世代』で、落語や大相撲をラジオで聴き、ザ・ドリフターズの番組を見て育ちました。今でも自宅ではまず新聞のラテ欄をチェックして興味のある番組をリストアップし、その間に仕事を入れているくらいです(笑)」

「BPOの現状をどのようにお考えですか。」



大日向 雅美(おおひなた・まさみ) 1950年生まれ。お茶の水女子大卒。同大学院修士課程修了、東京都立大大学院博士課程満期退学。学術博士。専門は発達心理学(家族・親子関係)。育児ストレスや育児不安を研究し、NPO活動にも取り組む。内閣府「男女共同参画推進連携会議」議長などを歴任。2004-09年 BPO 青少年委員会委員、委員長。16年から恵泉女学園大学学長。

若者の未来を拓く放送を

大日向 雅美氏

4月にBPO(放送倫理・番組向上機構)理事長に就任した

「お白ます」

「最近の各委員会の決定内容についての受け止めは。」

「問題となった案件も、その原因をたどっていくと、元々は小さな見過ごしや些細な判断ミス、単純な思い込み、事実確認の不足など、スタッフ間のコミュニケーションがもう少し綿密だったら防げたのではと思うことがあります。制作現場は多様化しているの課題はたくさんあるし、各社も努力

放送局からは『取締機関』と受け止められ、視聴者からは『身内の組織で甘い』と思われる、という声を耳にすることはあります。私が青少年

放送やウェブサイトの充実などの広報活動を強化していますが、それに加え放送局からも発信してもらいたい。BPOからこのような意見を受け取る

たとか、視聴者の声を参考にし、社内議論の結果、さらせん階段、みたいに気が付いたらレベルが上がっていったということ

を目標せたらいいと思っています。私は、文化とはそうやって良い方向に

進化していくものだと考えています。以前から「BPOには制作現場との交流が必要」という考えを示されて

いますね。

「これはぜひ、実行したい。私はこのままの大学での研究も現場主義なんでも変えていき、全国を歩いてヒアリングして論文を書きましたし、今取り組んでいる

地域の子育てを支援するNPO活動もきました。子ども向けの番組も増えま

まに現場です。各委員会と制作現場の方々との交流というのはこれまでも、努力を重ねてきていますし、事例研究会や地方での意見交換会なども行ってきました。それに加えて、このコロナ禍においてはオンラインの長所を活かし、会合に多くの方が参加できる可能性があるのでないかと考えています。さらに、一方的にBPOの委員会側からメッセージを伝えるだけでなく、空間を超えた相互の交流を工夫したい。そして、コロナ禍が終わったらぜひ制作現場の方々からBPOの委員に「今、こういう番組作りをしているけど、見に来ないか」などの提案をいただきたい。きつとどの委員の方も喜んで訪ねると思いますし、私も同行したいと思っています」

「コロナ禍での放送局の役割は。」

「BPOの理事長としてただでなく、一視聴者としてすぐ期待しています。子育て中の親にとり、テレビというのは「見せ過ぎてはいけない」といふのが、自分たちの仕事で日本や世界の未来を作っているんだ、という思いで取り組んでほしいです」

「今後の放送界に必要なことは。」

「配信事業者の台頭やSNSの普及など、現代社会には多種・多様な媒体が入り乱れていますね。その中で放送が役割を果たすために、BPOの使命を自覚し、自ら第三者の意見を聞く仕組みを設けて放送内容の向上を図る。Eということが、今こそ求められているのではないのでしょうか。そして、視聴者の信頼を得るような良い内容の番組を作り続ける、これに尽きると思っています。教育現場では、若者たちに生きる希望を与えるなど、放送の影響はとても大きいと感じています。放送界の方々には、自分の仕事が日本や世界の未来を作っているんだ、という思いで取り組んでほしいです」

(5月12日取材。聞き手：本紙・古賀靖典編集長)